

JA実践事例紹介

地域に開かれたJA女性組織 (後編)

千葉県JAいちかわ
地域の女性たちとのつながりづくり
「JA女性大学ふれあいカレッジ」
「JAカルチャー教室」

小川理恵

一般社団法人日本協同組合連携機構 基礎研究部長・主席研究員

JA女性組織は、70年を超える歴史のなかで、自給運動や産直活動、助けあい活動等を展開し、地域およびJAになくてはならない存在となり得た。一方で、高齢化と新規加入の停滞により部員減が進んでいる。地域に開かれた組織づくりや、地域住民とともに展開する新たな活動が求められている。JA女性組織の現状と活性化に向けた施策について、2JAの実践から探った。

後編では、JAいちかわの女性部・准組合員加入に結びついている「JA女性大学ふれあいカレッジ」、ならびに女性部員も講師として活躍する准組合員対象「JAカルチャー教室」の取り組みを紹介する。



女性部員がみそ造りの講師を務める准組合員対象「JAカルチャー教室」

1 地域住民との「つながり強化」の入り口～JAいちかわ女性部

千葉県北西部に位置するJAいちかわは、市川市、船橋市、浦安市、柏市北部を管内とする都市型JAである。都心から30キロ圏内という立地からベッドタウンとしての機能を果たす一方で、日本梨、ニンジン、ネギ、カブなど、多品目を生産する県内有数の農業地帯でもある。

都市部と農村部の両面を併せ持つという地域特性のもと、JAいちかわでは、「生命(い)・地域(ち)・環境(か)・和(わ)を大切に、協同活動を通じて地域社会に貢献します」という、「いちかわ」にちなんだJA運営の基本理念を掲げ、「地域農業の振興」と「ふれあい活動を通じた地域社会の活性化」を両輪とした総合事業を展開している。そのようななか、一般の地域住民とのつながり強化における入り口の1つとなっているのがJA女性部である。

同JAの女性部は、市川地区、船橋地区、柏地区の3つの地区別に組織されている。それぞれの地区独自の活動と全体を通じた活動とを並行して行う形としており、1つの地区で実施した結果、多くの参加者を得て、女性部がより活発化するきっかけとなった活動については、別の地区でも取り入れて幅を広げるなど、各地区が切磋琢磨しながら成長しあう良好な関係性を築いている。

なかでも船橋地区は農家女性が中心となって活動を牽引しており、船橋市と連携した農地を利用した防災訓練や、親子料理教室、フードライブなどに果敢に挑戦している。船橋地区からよい刺激を受けて、他の2地区で取り組みを始めることも多く、そうした柔軟さが、女性部としての活動全体の活性化に結びついている。



女性部船橋地区の親子料理教室

2 地域の女性たちとの新たな関係づくり～

「JA女性大学ふれあいカレッジ」

JAいちかわでは、地域に暮らす女性たちとの新たな関係づくりを目的として、2020年度に船橋地区女性部による「船女カレッジ」を試験的に実施した。すると毎回20名近くの女性が参加し、一定の成果を得るに至った。そこで、この実績をもとに、翌年の2021年度には、JAいちかわ全体の取り組みとして「JA女性大学ふれあいカレッジ」(以降、ふれあいカレッジと表記)として活動をスタートさせた。2021年度以来毎年実施しており、好評を得ている。

ふれあいカレッジの対象者は、JAいちかわとは縁の薄い一般の地域女性であ



J A女性大学ふれあいカレッジ

る。応募資格は20歳以上の女性であることのみで、年齢の上限はない。ふれあいカレッジの目的は「新たな仲間づくり」であり、修了後は准組合員や女性部員となって、J Aを舞台に活躍してもらうことを目標に掲げている。

募集は、市川市・船橋市・柏市が発行する、それぞれの広報誌の「募集コーナー」への記事掲載のみ

で行っている。あえて目立たない募集方法を選択していることには大きな目的がある。市の広報誌をくまなく読み、小さな記事に目をとめてまで応募してくれるのは、地域への思いが強く、J Aへの興味も持ち合わせている証拠だと考えられる。J Aは単なるカルチャーセンターとしてではなく、あくまでも「J Aの仲間づくり」の一環としてふれあいカレッジを運営している。だからこそ、そうした意識の高い女性たちに参加してほしい、というJ Aの思惑が、広報誌での募集という形となって表われているのである。ミニマムな募集にもかかわらず、毎年予定人数の60名を大きく超える応募がある。

3 ふれあいカレッジから、准組合員・女性部員へ

ふれあいカレッジは1期1年で、毎年3回の講座を実施している。仲間づくり拡大の観点から、継続受講は原則禁止であるが、新たな友人・知人を誘ってきた場合のみ可能とする仕組みとなっている。

新規受講者が前提のため、基本的には毎年同じカリキュラムを実施している。1回目の講座は地区ごとに開催しており、開校式と、フラワーアレンジメントや米袋のエコバッグ作りなど、J Aらしさや各地区の特徴を加味した体験活動を組み合わせて実施する。2回目以降は3地区合同で開催する。2回目の講座は、J Aいちかわの事業等への理解を深めるために、特産のナシと米の収穫期に、梨選果場や大型精米機等を見学し、昼食には新米などを使用したお弁当を準備して、地域産の農産物を存分に味わってもらう。3回目は閉校式で、ホテルを会場にテーブルマナー教室を実施する。毎回の講座では、受講者1人につき3,000円から5,000円の費用がかかるが、受講者から徴収する参加費は各回1,000円のみで、差額についてはJ Aが負担している。

それぞれの講座の合間に、「J A理解講座」と銘打った学びの時間を設けていることも大きなポイントだ。特に最終回の閉校式では、J Aが作成したスライドを流して、協同組合や地域農業への理解を深めるためのレクチャーを丹念に行う

ようにしている。例えば2月に予定されている2024年度の閉校式では、組合長自らが壇上に立って、今年話題となった米不足に関する講話を、受講生たちにわかりやすい言葉で語り掛ける予定である。

1年の講座を通して、JAへの親近感が高まり、多くの受講生が、新たに同JAの准組合員や女性部員となる流れが構築されている。2024



JA理解講座

年度は、第1回・第2回講座を終了しているが、第1回で21名、第2回で14名がすでに准組合員に加入している。また、全国のJA女性組織で、コロナ禍で活動が停滞したことを理由に、集落でまとまってメンバーが脱退する現象が起きるなか、同JA女性部においては、部員数が増加傾向にある(表)。その多くが、ふれあいカレッジを経由しての加入だとのことである。直近3年間では、ふれあいカレッジ参加者から50名以上が女性部に加入した。しかし地区によっては、加入要件を農業従事者に限っており、部員増には結び付いていない。JAいちかわは、そうした要件緩和を今後の課題としている。

表 JAいちかわ女性部のメンバー数の動向

	市川地区	船橋地区	柏地区	合計
2022年度	220	65	39	324
2023年度	240	60	52	352
2024年度	260	61	67	388

資料：JAいちかわ提供データをもとに筆者作成

4 准組合員化のその後をつなぐ

「JAカルチャー教室」では女性部メンバーが活躍

さて、せっかく准組合員になったものの、加入しただけで終わっては意味がない。そこで、JAいちかわでは、准組合員化の「その後」に着目し、新たに准組合員になったメンバーとの関係性をより深めることに注力している。その取り組みの1つが准組合員を対象とした「JAカルチャー教室」である。

JAカルチャー教室は、新規加入した准組合員のメリット創出のために設立したもので、地場産の農産物を利用した料



JAカルチャー教室

理教室や、専門家による健康教室、J Aの施設見学など、彩り豊かな講座を年に数回実施している。

なかでも料理教室は、J A女性部員が講師を務めており、わかりやすくなるためになると好評を博している。准組合員とJ A女性部とが交流を図ることで、女性部活動への興味を深める好機となり、准組合員加入にとどまっていた女性が、新たに女性部にも加入するきっかけとなっている。

先にも述べたように、ふれあいカレッジの受講者は、地域への思いが強い傾向がある。そうした潜在的な人材を逃さず、魅力を感じ続けてもらえるような工夫を、J Aと女性部が一体となって創出している。その結果、ふれあいカレッジを経由して女性部に加入したメンバーは、総じて女性部活動等への参加率も高くなるそうだ。

J A女性部は、2023年5月より毎月、地元のケーブルテレビJ : C O Mの『地場野菜まるごと!! 使い切りエコクッキング』に、3地区持ち回りで出演するなど、地域への発信力をますます高めている。こうしたことも、地域の人々にJ A女性部やJ Aを身近に感じてもらうための後押しとなっている。

5 「教育文化部」が地域との橋渡しを

女性部の事務局を務めるのは、2022年に新設された「教育文化部」だ。J Aいちかわは、2019年度に「第70回家の光文化賞」を受賞した。このことをきっかけに、教育文化活動により注力するために、名称を「相談部」から「教育文化部」に変更し、組合員（生産者）と地域住民をつなぐ専門部署として再出発した。教育文化部が旗振り役となって実施する様々な地域行事は、なんと年間125日を数える。

「J Aいちかわでは、『協同活動強化3か年計画』（令和4年度～令和6年度）を定め、組織活動や各種イベント等を通じて、組合員・地域利用者との“絆づくり”を強化すること、そして組合員・地域利用者が元気に暮らせる地域づくりに貢献することをしっかり謳っています。そのなかで、地域に暮らす女性たちの入り口となるのが女性部です。これからも、女性部とJ Aとが連携しながら、この地に暮らす女性たちが幸せだと感じられる地域づくりを目指していきます」（組織・経済部門担当 伊藤研吾常務理事）。



令和5年度「第65回全国家の光大会」では、女性部事務局の笠井絵里子氏が「教育文化部」と題して体験発表を行い、普及・文化活動の部で家の光協会会長賞を受賞した
[\(発表内容はこちら\)](#)

6 おわりに～J A女性組織の活性化を目指して

J A女性組織が抱えるメンバーの減少や活動のマンネリ化の課題を踏まえ、地

域に根差したJ A女性組織づくりの必要性を、静岡県のJ Aしみずと千葉県の子Aいちかわの実践を通して考えた。最後に2つの事例の共通項から、ポイントとなる点を見てみたい。

まず1つ目は、J Aの強いコミットメントである。どちらの事例も、J A自体が地域を包括した協同活動に積極的に取り組

んでおり、その方向性に沿うように、J A女性組織活動も、広く地域を舞台とした活動へと展開していた。地域に密着したJ A女性組織活動を実現するには、J A自体が地域に開かれた組織であることが肝要なのは言うまでもない。

また、J Aいちかわでは、今野博之組合長が、あらゆるJ A女性部活動に顔を出し、必要であれば新たなアイデアも提案するなど、積極的にJ A女性部に関わっている。その理由を組合長に尋ねると「トップが女性部を大切にしていれば、職員は自ずと『女性部活動は重要なんだ』と認識するからです」という回答が返ってきた。こうした経営陣の行動も、J AとJ A女性組織の協力体制構築のためには必要であろう。

2つ目は、J A女性組織内の各支部や地区が、それぞれの活動のよいところを共有し、切磋琢磨することである。J Aしみず(前編)の各支部長が話していたように、同じJ A内であっても、案外お隣の支部活動については知らないものである。特にコロナ禍においては、思うように情報共有ができなかった事情もある。活動のマンネリ化が全国のJ A女性組織で課題となるなか、まずはいったん、自らのJ A女性組織活動を棚卸しし、残すべきことと刷新すべきことを俯瞰してみることが重要である。そして、それらを各支部や地区で共有し合えば、そこから新たなアイデアが生まれてくる。両事例ともに、他の支部や地区で実践し効果のあった活動を共有し、よいところを取り入れることで、J A女性組織活動が、広く地域を巻き込んだ活動へと展開していた。

全国のJ Aにおいて、正組合員数が減少し、ややもすると農業との関係が希薄となる准組合員の比率が高まる傾向にあるなか、地域住民とのつながりづくりの重要性が増すことは間違いない。そのようななか、J A女性組織が地域住民の窓口の1つになり得ることを、あらためて認識する必要があるのではないか。J AとJ A女性組織のより一層の協力体制の強化が望まれる。

(2024年9月取材)



J Aいちかわでは、今野組合長が女性部活動に積極的に参加